



関西支部活動トピックス (7~9月)

関西支部

部品運営委員会韓国開催

8月22日 (木) ~25日 (土)

支部部品運営委員会 (委員長: ホシデン (株)・古橋健士社長) は韓国で委員会を開催すると共に、現代自動車/牙山工場、サムスン電子/水原事業場・人力開発院を訪問し、各社幹部との懇談および工場・施設の見学を行いました。

現代自動車・牙山 (アサン) 工場: 22日午後



紹介ビデオ視聴と工場概要説明の後、韓国グリーンビジネス協会 (KGBA) の

Paeng 会長 (現代自動車・元社長) より歓迎挨拶がありました。牙山工場は同社最初の工場で、1976年に操業を開始、現在は180万 m²の敷地に約4,000名の従業員が2交代で勤務し、輸出戦略車である中型セダン「ソナタ」、高級セダン「グレンジャー」を中心に、30万台/年の乗用車と60万台/年のエンジンを生産しています。プレス (5,000t 級プレス機で多品種のパネルを同時成型)、溶接 (330台のロボットによる自動化)、組立 (組付け部品は3万点超。作業の難しい箇所はロボットで組付け。生産タクトは57秒/台) の各ラインを見学しました。塗装ラインは、埃による品質問題を防ぐため見学不可で、ビデオにより紹介されました。

懇親夕食会: 22日夕刻

見学のお礼を兼ね、Paeng 会長、ならびに現代自動車・IT 事業領域より Jang 副社長をはじめ幹部の方々をお招きし、夕食会を催しました。Jang 副社長より「HV、EV の伸長に連れ自動車分野でも高性能・高品質な電子部品のニーズが高まる。ぜひ協力と連携を深めて行きたい」と挨拶がありました。

サムスン電子・水原 (スウォン) 事業場: 23日午前



崔副社長、朴副社長はじめ幹部の方々のご挨拶に対し、古橋委員長より今回の訪問趣

旨と手厚い対応への感謝を述べました。広報館では歴代製品の展示に沿い、同社の沿革が説明されました。水原事業場はサムスン電子発祥の地ですが、既に工場はほとんど移転し、現在は R&D の拠点となっています。建物のデザインは個々に異なり、緑豊かな敷地を私服の若い社員が行き交う風景は、大学キャンパスの様なイメージで、グローバルに成長を続ける活力も感じさせます。見学後は事業場内 VIP 会食室で同社主催の昼食会があり、懇談と情報交換を行いました。

サムスン電子・人力開発院: 23日午後



人力開発院は同社最大の研修施設で、水原東方の龍仁 (ヨンイン) にあります。申副院長の歓迎挨拶と紹介ビデオ視聴に続き、副院長のご案内で各施設を見学しました。「人材第一」、「企業は人なり」の理念に基づいてサムスンの文化・価値観を習得させ、グローバルに活躍する人材、次世代のリーダーを育成しています。カリキュラムは、①感性を育て創造性を豊かにする、②コミュニケーション能力を高める、ことに重点が置かれており、ピカソ等著名な芸術家の作品をモチーフにした教室・廊下や、ワインバーを備えたコミュニケーションルーム等、施設にも様々な工夫がこら

されています。

定例委員会: 23日夕刻

宿泊先ホテルで委員会を開催、メンバー各社の現地責任者より韓国経済の動きや市況について報告がありました。また、今後の委員会行事について審議しました。

2013技術セミナー

9月13日 (金) 大阪歴史博物館



関西支部では、わが国製造業、特にエレクトロニクス産業における新たな成長実現の方向を探るべく、「日本が取り組むべき成長戦略とは！ー閉塞感の殻をぶちやぶるためにー」をテーマに、標記セミナーを開催しました。プログラムは次の通りです。

○開会挨拶 関西 IT・ものづくり技術委員会
委員長

藪田哲史氏 (シャープ (株))

○「創発的破壊：イノベーションとパラダイム
チェンジ」

一橋大学イノベーション研究センター
教授/プレトリア大学 GIBS 日本研究
センター所長 米倉誠一郎氏

○「アップルのものづくり経営に学ぶー日本のエ
レクトロニクス企業へのインプリケーションー」

(株) ニッセイ基礎研究所 社会研究部
上席研究員 百嶋 徹氏

○「富士フィルムの研究開発の変革と新規事業
創出の戦略」

富士フィルム (株) R&D 統括本部
技術戦略部長 井駒秀人氏

○閉会挨拶 関西 IT・ものづくり技術委員会副
委員長

渡辺善規氏 (パナソニック (株))

一橋大学・米倉教授は、「成長戦略」を描くのは国ではなく個々の企業であると強調されました。①日本では、「イノベーション」は「新しい技術・ビジネスモデル」と捉えられているが、本来は「新たな組合せによる価値の創造」であり、組織や市場の変革を含む広い概念である。②日本の一人当たり GDP は17位(2011年)で、生産性の向上が急務だが、日本企業のイノベーション戦略担当者は2割がイノベーションの重要性に否定的で、意識改革が必要。

③グローバル化が進む中、国内市場への固執はコストにおける圧倒的不利を意味し、世界市場を目指さない戦いはあり得ない。④現在の日本が抱える課題は将来的に全人類が直面するもので、そのソリューションは大きな価値を持ち、これを世界に提供して行くことが重要である。こうした内容が豊富な実例を引用しながら述べられました。

次に、(株) ニッセイ基礎研究所・百嶋氏からは、アップルのものづくり経営に関する詳細な分析が示されました。その特徴として、①戦略的なアウトソーシング、②サプライチェーン全体の緻密なデザイン、③その細部にわたる厳密なコントロール、が挙げられます。主力製品の競争激化に伴いつつてのファブレスモデルを脱し、自社による設備投資が進められています。現在、業績は踊り場を迎えており、さらなる革新的製品・サービスが実現しなければ、高成長を支えたコスト構造とビジネスプロセスは修正が必要となるでしょう。とは言え、より良い世界への志を原動力に、創造性と経済性を両立する体制を徹底的に追及する姿勢に、日本企業が学ぶべき点の多いことが主張されました。



最後に、富士フィルム (株)・井駒氏からは、デジタル化の進展による写真事業の衰退に応じ、事業構造と社員の意識を改革して「第二の創業」をめざす同社の取組みについて説明がありました。「絶えず新たな商品・事業を産み、変化し続ける企業」を目指し、経営層が参画するテーマ評価システムの刷新、独自技術を追求する先進研究所の設置等、R&D 体制の改革が進められました。オープンイノベーションの活性化に向け、社内外とのグローバルな交流・連携も強化した結果、感光材料で培った各種コア技術を応用し、多くの新規商品開発(機能性フィルム、ヘルスケア、医薬品・再生医療等) が実現した、とのことでした。

当日は、ほぼ満席となる約240名の参加があり、アンケートでも大変高い評価が得られました。